

1

# 文学的文章の読解① (物語)

学習日

—

## 問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(函館ラ・サール中学校)

《クラスメイトのジムが持っている絵具がほしかった少年は、誰もない昼休みにジムの机の中からその絵具を盗んでしまい、次の休み時間にその絵具が少年のポケットから発見されてしまいました。》

「泣いておどかしたって駄目だよ」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような、憎みきったような声で言って、動くまいとする僕をみながら寄ってたかって二階に引張って行こうとしました。①僕は出来るだけ行くまいとしたけれども、とうとうカマかせに引きずられて、階段を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受け持ちの先生の部屋があるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは入ってもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お入り」といふ先生の声が聞こえました。僕はその部屋に入る時ほどいやだと思っただけはまたとありません。

何か書きものをしていた先生は、どやどやと入って来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖に男のように頸の所でぶつりと切った髪の毛を右の手で撫であげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、一寸首をかしげただけで何の御用という風

10

をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことを委しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか」と聞かれました。本当なんだけれども、僕がそんないやな奴だということはどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったです。だから僕は答える代わりに本当に②泣き出してしまいました。

先生は暫く僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向って静かに「もういつてもようございませう」といって、みんなをかえしてしまわれしました。③生徒達は少し物足らなそうにとやどやと下に降りていってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに、自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか」と小さな声で仰いました。僕は返したことをすっかり先生に知ってもらいたかったので④深々と頷いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだと思ったと思いますか」もう一度そう先生が静かに仰った時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇を、噛みしめても噛みしめても泣き声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

「あなたはもう泣くんじやない。⑤よく解ったらそれでいいから泣

30

25

35

くのをやめましょう、ね。次の時間には教室に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらっしやい。静かにしてここにいらっしやい。私が教室から帰るまでここにいらっしやいよ。いい」と仰りながら僕を長椅子に坐らせて、その時また授業の鐘がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられたましたが、二階の窓まで高く這い上った葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎって、しくしくと泣きつけていた僕の膝の上にそれをおいて、静かに部屋を出て行きなさいました。

一時がやがやとかましかった生徒達はみんな教室に入って、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋しくって淋しくってしょうがない程悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと、僕は本当に悪いことをしてしまったと思いました。葡萄などはとても食べる気になれないで、いつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさました。僕は先生の部屋でいつの間にか泣き寝入りをしていたと見えます。少し痩せて身長の高い先生は笑顔を見せて僕を見おろしていられた。僕は眠ったために気分がよくなって今までであったことは忘れてしまって、少し恥ずかしそうに笑いかえしながら、慌てて膝の上からすべり落ちそうになつていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して、笑いも何も引っ込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたもお帰りなさい。そして明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。きつとですよ。」

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたり

しながら、つまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしく食べてしまいました。

※ 次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹が痛くなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんと見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、まず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいて、どぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て「見る泥棒の嘘つき日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのに、こんな風にされると気味が悪い程でした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰わなくてもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕達を向い合せました。僕はでも

と、ジムはぶら下げている僕の手をいそいそと引っ張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといってこの嬉しさを表せばいいのかわからないで、ただ恥ずかしく笑うばかりありませんでした。ジムも気持ちよさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真っ赤にして「ええ」と白状するより仕方がありませんでした。

「そんならまたあげましょうね。」

そういって、先生は真っ白なリネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真っ白い手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鋏で真ん中からぶつりと二つに切って、ジムと僕とに下さいました。真っ白い手の平に紫色の葡萄の粒が重なって乗っていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしても僕の大好きなあのおい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇えないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

〈有島武郎「一房の葡萄」より〉

□(1) ※ □に入る最もふさわしいことばを次から選び、記号で答えなさい。

- ア そのうえ
- イ だから

ウ もちろん

エ けれども

□(2) 線①「僕は出来るだけ行くまいとした」とありますが、その様子を表した次の語句の□に当てはまる漢字を一字で書いて答えなさい。

〈② あがき〉

□(3) 線②「泣き出してしまいました」とありますが、少年はなぜ泣きだしてしまったのですか。その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア クラスメイトの告げ口のせいで、絵具を盗んだことが本当かと先生に尋ねられることとなり、事実を自分の口から伝えなければならなくなったことが悔しかったから。

イ クラスメイトに連れられて入った先生の部屋で、じっと見つめてくる先生の眼差しから全てを見抜かれていることに気づき、反省して泣くしかなかったから。

ウ 絵具を盗んだという知られたくない事実について先生に尋ねられたのだが、今さら盗んでいないと嘘をつくわけにもいかず、返答に困ってしまったから。

エ クラスメイトだけではなく大好きな先生までもが自分に対して責めるような眼で見ていたので、辛さのあまり涙が止まらなくなつたから。

□(4) 線③「生徒達は少し物足らなそうに」とありますが、生徒たちが物足りなく思った理由としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

□

